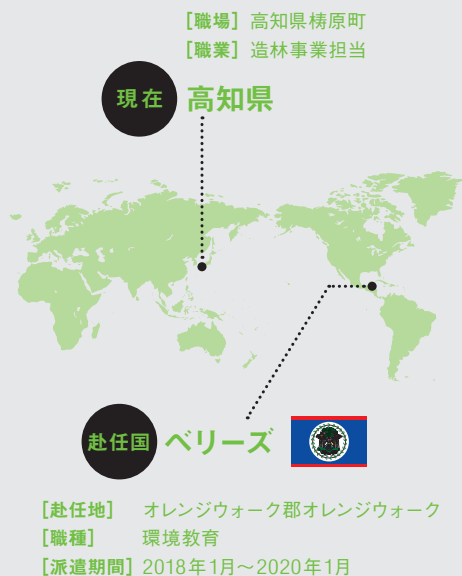




「木」と「人」と「未来」をつなぐ JICA海外協力隊経験者が描く、持続可能な未来

木村 正樹さん 矢崎総業株式会社 経営企画室 造林事業担当／MOCTORY 主宰
Masaki Kimura

矢崎総業株式会社で新規事業を担当する木村正樹さんは、
JICA海外協力隊（以下、JOCV）での経験を活かし、高知県梶原町でゼロから造林事業を立ち上げました。
そこでの課題意識からJOCV経験者の社会起業を支援する「JICA海外協力隊起業支援プロジェクト『BLUE』」に参加。
独自の木工事業「MOCTORY（モクトリー）」を考案しました。

造林事業を支える情熱

矢崎総業株式会社は、自動車部品の製造・販売を主力とするメーカー企業だが、近年では新たな事業領域への展開を加速させている。高知県梶原町で進行中の造林事業もその一つ。地域の森林保全と雇用創出を目的とした新規事業である。

この事業を牽引するのが、JOCV経験者の木村正樹さんだ。環境教育の隊員としてベリズに派遣されていたと聞けば、その経験が買われて抜擢されたと想像するかもしれない。しかしこの造林事業は、木村さんが社内の技術ノウ

ハウと地域のリソースを結びつけ、ゼロから立ち上げたものだ。「新しいことをやろうとただ訴えても、人は動きません。特に技術者たちには、数値データなど具体的な根拠を示さなければ理解されないのです」相手の専門性を尊重し、状況を俯瞰する感覚と持ち前の行動力で、粘り強く信頼を獲得していったのだろう。

現在、この造林事業は木村さんを含め5名ほどの体制で行われている。このうち現場で作業する3名は、元々県内の関連工場で生産技術支援を行っていた50代前半の男性だ。「面接の時、チャレンジするのが好きと聞いて、親近感を覚えたんです。ぜひ一緒に働きたいと思いました」人生半ばを過ぎ、門外

漢の部署へ配置転換を志願した男性たちの生き方に、木村さんは強く惹かれたという。現場の作業をマネジメントするのが役目だが、「みなさんに可愛がってもらっている」という木村さんは、共に山に入り、時にはJOCVの話もするそう。木村さんの謙虚な姿勢と、前向きな意欲が、一緒に働く人々の心をいっそう惹きつけているのだろう。

JOCVで得た、 「生きる力」

「JOCVに参加したことで、『こうあるべき』という縛りから解放された」という木村さん。もともと強い信念と行動力



新規事業座談会で造林事業の話をする木村さん



梶原町の現場でともに山に入り造林事業にチャレンジする仲間たち



青空教室で子どもたちにゴミの分解年数を教える

があったというが、JOCVに参加し、周囲の期待や固定観念に惑わされることなく主体的に行動できる環境に身を置いたことで、真の自分らしさを発揮できたのだという。JOCVが木村さんにとって人生観を揺さぶるかけがえのない経験だったことは、「人生で最高の時間でした！」という一言で十分だろう。そんな木村さんの、ベリーズでのエピソードを二点紹介する。

一つ目は、ゴミ収集員にスポットを当てた環境啓発活動だ。「ゴミ収集の仕事はとても大切なのに、住民から十分に評価されていない」と感じた木村さんは、作業の様子をドローンで空撮し、SNSで公開した。この動画が大きな反響を呼び、地域住民の収集員への意識と共に、収集員の勤務態度にも変化をもたらした。「誰かに見られているということが、意識改革につながり、自分の仕事に誇りが持てるようになったのだと思います」この事例は、SNSやデジタル技術を効果的に取り入れた、現代の象徴的なJOCV活動の一つといえる。

二つ目は、木村さんの心に焼きついた、ある日常の記憶だ。長距離バスに

乗り静かに風景を眺めていたら、突然、乗客たちが賛美歌を歌い始めたことがあった。その歌声は、何もない広大な自然のなかに響き渡り、木村さんの心を打ったという。「豊かな自然と賛美歌が調和し、なんとも言えない美しさに、思わず涙が溢れました」日本を離れ、遠く異国の地で奮闘するJOCVは、誰もが一度は、些細な日常のなかで忘れられない瞬間を経験する。水平線に広がる夕陽、子どもたちと交わした言葉など、その形は様々だ。いま、この瞬間にも、地球のどこかで孤軍奮闘するJOCVがいることを思い出させてくれるエピソードだ。

木と共に生きる、 新たな挑戦

「造林で生計を立てる人たちの笑顔。これは絶対に守らなきゃいけない」地域資源とともにある小さな商いが淘汰されていくことは、ベリーズや梶原町でひたむきに働く人々の生き方を知る木村さんにとって、受け入れ難い現実だ。

こうした思いから、木村さんは、2024年に始動した社会起業家を目指すJOCV

木村 正樹さん プロフィール

千葉県出身。メリーランド大学院卒。貿易業に従事した後、協力隊に参加。帰国後は、矢崎総業株式会社に新規事業を担当、高知県梶原町にて造林事業の立ち上げを行う。JOCV起業支援プロジェクト「JICA BLUE」の第1期生。

経験者を支援するプロジェクト「BLUE」に参加を決意。プロジェクトを通して造林の新しいビジネスモデルを考案し、挑戦を試みている。「私の名前、木村正樹は、3つの“木”で成り立っているんです」と木村さん。大胆な表現だが、陳腐に感じさせないのは、木村さんのキャリアと実績が、その言葉に説得力を与えているからだ。「必要なのは、木を見て森を知る姿勢。ひとりで解決できることは何ひとつない。多くの人の協力を得ながら一緒に取り組んでいきたい」と話す。経済活動、そして地域社会や環境への貢献…林業と人々の未来を見据え、熟考された木村さんの事業計画に、いま、賛同の声が集まりはじめている。

木村さんへの エール！

四国部品株式会社
新領域事業部
岡 良雄さん



木村さんの熱意にいつも助けられている

製造、販売が主力の企業で、全く業種の異なる造林事業を立ち上げるのは、様々な困難があったと思いますが、木村さんの造林への熱意とチャレンジ精神でいくつもの困難を乗り越え実現したのでしょうか。木村さんは常に前向きで、新しい事でもまずはやってみようと、私たちを後押ししてくれるので、様々な面で助けてもらってます。これからも熱い思いを絶やさず、色々な事にチャレンジしてほしいですね。